

## ビヤが犯した戦略上の過ち

会議派同盟を工作したアンヘレスは、その結束の脆さを十分に理解していた。会議派の中でただ一人、彼は軍事情勢を的確に判断し、同盟は初期の段階では長所を発揮する一方、長期的にはその効力を失うであろう事を十分に予測していた。アグアスカリエンテスでカランサ派の指導者と接触した経験で、彼は相手の長所短所を理解していた。アンヘレスはビヤ以上に会議派の資金源に限界があることに気付き、抗争が長期化すると、これまで課税したことの無い外国人所有の土地財産に手をつけることになるだろうと考えた。もしそうならば、会議派は更に強力な相手を敵に回すことになる。<sup>42</sup>

アンヘレスは会議派軍をメキシコ市に止めず、ベラクルースにあるカランサの本拠地を攻撃しようビヤを説得した。勢いに乗ったビヤ軍はグティエレス軍と、外に出たがらないサパタ軍を説得し、共同してベラクルースを攻撃できると思っていた。パブロ・ゴンザレスの部隊は士気低下で脱走兵が続出し、オブレゴンもカランサ軍を十分に掌握していなかった。

ビヤは最初その気になったが、カランサ軍が迫っていることを知らせるトレオンの指揮官エミリオ・マデロの電報を見て、すぐに気が変わった。ビヤは直ちに北上してトレオンを解放し、更にサルティヨとモンテレー攻略をアンヘレスに命じた。アンヘレスは我々の本拠地はメキシコ市でトレオンではない事、マデロは十分な兵力を持っていて対抗できること、全ての頭であるカランサを叩くことが先決である、と執拗に反対したけれども、ビヤは頑として聞き入れなかった。

アンヘレスは正しかった。この時カランサを攻撃していたら、恐らく勝利していたか、少なくとも長期的には不利とされていた状況を打開できたことは間違いなかった。この致命的な決断の基になったのはビヤの地域主義にあり、メキシコを全体として捉える能力が欠けていたことによる。また別の見解は、ビヤとサパタがソチミルコで交わした秘密協定に原因があったとしている。ビヤは北、サパタは南と其々の軍事行動の範囲が決められていた。プエブラを通過してベラクルースを攻略する事はサパタの権利を蹂躪することになる。サパタが特に心配したのは、プエブラの州都を守っていたのはモレロスからのサパタ軍ではなく、ビヤの宿敵オロスコ軍の残党であった故、ビヤがプエブラに入ればビヤの報復は必死であるということであった。

ビヤがアンヘレスを北へ向かわせた事は、単にベラクルース攻略を遅らせるような短期的なものではなく、完全な戦略の変更を意味していた。ビヤは大部分の兵を伴ってメキシコ市を離れ、北と西にあるカランサ軍壊滅に動き出した。ビヤとアンヘレスはその作戦で勝利を重ねたにもかかわらず、カランサの部隊は一つも壊滅されず、オブレゴンに来るべき大作戦の準備に必要な時間を与えただけであった。オブレゴンはビヤの攻撃を受けたらベラクルースの港を持ちこたえる事には悲観的であり、更に南のテウァンテペック地峡ま

で逃れることを検討していた。ビヤが攻撃しないと知ったとき、オブレゴンは驚き、そして安堵した。<sup>43</sup>

戦いが再開した初期の段階ではビヤの北西部作戦は功を奏したかに見えた。僅か三週間ほどでメキシコの第二の都市グアダラハラと第三のモンテレーを占領した。ビヤの人気は低所得層のみならず中産階級の間でも高まった。グアダラハラを最初に占領した革命軍は、カナネア銅山ストライキを組織したPLM支持者マヌエル・ディエグスを頭とするカランサ軍であった。ディエグスは聖職者を処刑し、労働者にストライキを奨励、多くのウエルタ支持者を撃つか投獄し、富者や支配層から財産を没収した。没収は大規模であったのに、貧者には一切還元されなかった。僧侶の処刑、そして横暴な兵士を憎んだ住民は富者も貧者も共にカランサ軍を憎んでいた。地元の革命家フリアン・メディナを初め、ディエグスの兵士多数が脱走して北部師団に加わり、ディエグスは戦わずしてグアダラハラを明け渡した。ビヤは「ビバ・ビヤ」の大歓声に迎えられた。ディエグス軍よりは規律正しく、僧侶の処刑も止まって富者は一安心したのも束の間、ビヤがウエルタの高官を処刑するに及んで、住民の熱も急に冷めた。富者への強制徴用、兵や将校への農地分配、大農園の外国人への転売の禁止など、次々に出された政策により富裕層の態度は一変した。一方グアダラハラの貧困層の間でビヤは熱狂的な支持を得ていた。<sup>44</sup>

42. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P478

43. Ibid. P479

44. Ibid. P480